

## イチゴ「女峰」における本圃増殖法の適用性

野菜・花き部門 井口 工

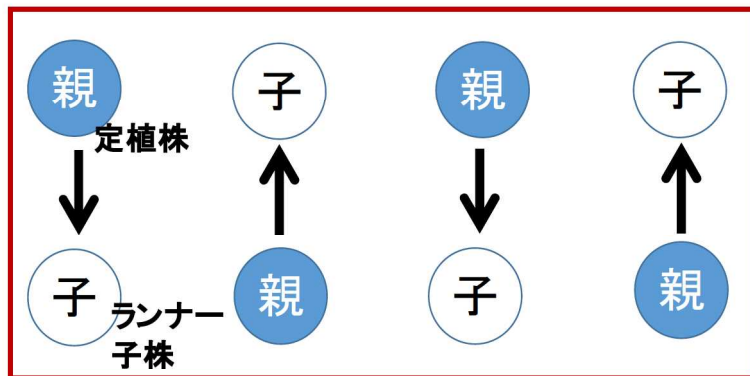
イチゴ品種「女峰」高設栽培において、本圃増殖法を利用した作型の適用性を検討しました。7月下旬及び8月上旬、ピートバッグに親株定植し、2倍に増殖させると、慣行のポット促成栽培と比較して、開花が5日程度遅くなりましたが、ほとんどの株が11月中には開花しました。また、年内の収量は慣行区よりやや少ない傾向ですが、1月～2月の収量は慣行区が大幅に減少したのに対して、安定した収穫量が確保できました。「女峰」の本圃増殖法は慣行作型と組み合わせることで、育苗作業の労力軽減だけでなく、全期間の収穫量を平準化できる可能性があります。

### 1 はじめに

イチゴのポット促成栽培は、9 cmポットまたは大型セルトレイ（24 穴または 35 穴）で育てた苗を検鏡により花芽分化を確認し、9月中旬に定植する作型(促成栽培)が一般的です。しかし、その苗を確保するために行うランナー増殖による育苗作業は、前作の作業管理と重複し、最も暑い時期の作業となることから省力化が望まれています。すでに「さぬき姫」については、7月上旬～下旬に定植株を本圃に定植し、発生したランナーを増殖させる定植法（本圃増殖）を開発しており、普及が始まっています。そこで、今回、「さぬき姫」に次いで県内各地で栽培されている「女峰」について、ピートバッグ培地での本圃増殖法の適用性を検討しました。

#### イチゴ本圃増殖法とは

7月～8月上旬に本圃定植株数の25～50%の苗（親株）を本圃へ定植し、その親株から発生するランナー子株を随時、培地上に配置して、定植・活着させる方法です。最初に定植した増殖用の苗（親株）とその後に増殖・育苗した子株は、当初生育差がありますが、頂花房出蕾期頃（10/中下旬）までには生育差はほぼ無くなり、同様の株となります。育苗施設が半分で済むことや7月に定植すれば炭疽病発生期（8月）のリスクが大幅に下げられる。などのメリットがあります。



ピートバック定植の場合

図1 本圃増殖（2倍増殖）のイメージ

## 2 結果

### (1) 生育及び頂果房調査

本圃増殖では、最も暑い時期の定植となるため、ハウス全体の温度を下げるのがポイントです。本試験では強い日射による温度上昇を抑えるためハウス外側に遮光剤（アキレスファイブシェード）塗布を行い、内側に寒冷紗を張り、遮光率 55%程度としました。その結果、7/29 及び 8/5 に定植した本圃増殖親株（各 24 株）は全て健全に生育し、また、ランナー子株も 8/10 までに植え付けが完了し、欠株は発生していません。

次に、本圃増殖区の頂果房開花日は、④慣行区が 11/10 前後に開花したのに対し、本圃増殖区が 11/15 前後となり 5 日程度遅れ、株により、開花日のばらつきがやや大きい結果となりました。しかし、本圃増殖区のほとんどの株が 11 月中に開花しました。さらに、本圃増殖①、②区の出蕾日及び開花日に大差はありませんでした（表 1、図 2）。本圃増殖①、②区については窒素中断による花芽分化促進処理を 20 日間実施しました。そのことによって、株の生育に大きな影響はありませんでしたが、開花がやや遅れたため、処理時期や期間をさらに検討する必要があります。

表 1 本圃増殖した株の育成概要、頂果房出蕾・開花、慣行区との比較

各区36株調査

No.	各調査区	親株・苗	ランナー子株	窒素(施肥)中断	施肥	頂果房	標準誤	頂果房	標準誤
		定植日	定植期間	開始日	再開日	出蕾日	差	開花日	差
①	本圃増殖(親株7/下旬定植)	7/29	8/2~8/7	8/25	9/15	11/5	±1.2	11/15	±1.0
②	本圃増殖(親株8/月上旬定植)	8/5	8/5~8/10	8/25	9/15	11/4	±1.0	11/15	±1.0
③	夜冷促成(8/20~ 16日間)	9/11	—	—	—	10/16	±0.4	10/30	±0.5
④	ポット促成(慣行)	9/18	—	—	—	10/27	±0.3	11/10	±0.3

※培養液の管理(施肥量) I 7/25~8/5日、EC0.4 II 8/6~8/25, EC0.6 III 8/26~9/14, EC0.0 IV 9/15~, EC0.6

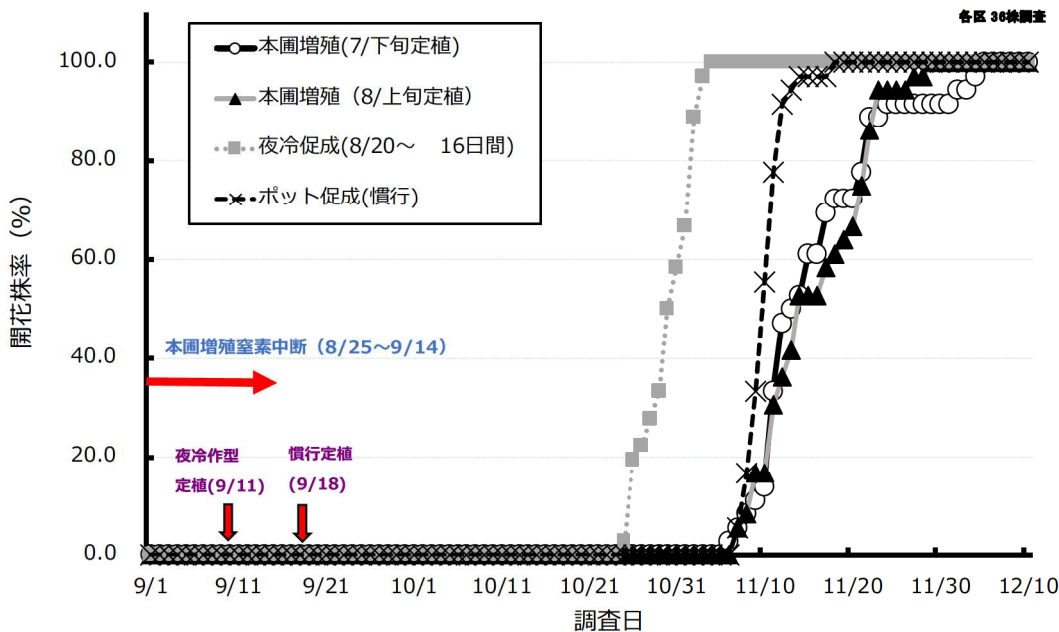


図 2 「メジロ」本圃増殖における開花日、慣行区との差

(2) 収量調査

④慣行区の収穫開始日は11/30でしたが、本圃増殖①、②区とも12/4より収穫が始まりました。年内の収量は本圃増殖①区が④慣行区比65%、②区が④慣行区比60%程度でしたが、収穫全期間(11月～5月)の収量は、①本圃増殖・早期が④慣行区比109%、②本圃増殖・後期が103%となり、いずれも慣行をやや上回りました。③夜冷促成区は収穫開始が11/24と早く、結果、年内収量が多くなり、全期間収量が慣行より多くなりました。また、2つの本圃増殖区(①、②)を比較すると①の7/29に親株定植した区が②の8/5に親株定植した区よりも商品果平均果重、全期間収量が上回っています。早めに定植することで、その後のランナー子苗の生育期間も長くなり、生育量も多くなり結果的に収量に影響したと考えられました(表2、図3)。

表2 本圃増殖が「女峰」の収穫量に及ぼす影響\*

(16株当たり、個、g)

No.	各調査区	年内収量(～12/31)		商品果		不受精果外		合計		商品果 平均果重	10a換算 商品果収量(kg)	慣行 対比
		商品果重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量				
①	本圃増殖(親株7/下旬定植)	1,146	614	10,168	102	1,663	716	11,831	16.6	5084	109	
②	本圃増殖(親株8/上旬定植)	1,050	592	9,535	91	1,404	683	10,939	16.2	4768	103	
③	夜冷促成(8/20～16日間)	1,722	641	9,919	119	1,567	760	11,486	15.5	4960	107	
④	ポット促成(慣行)	1,760	588	9,299	108	1,817	696	11,116	15.8	4650	100	

\*収量調査：令和3年5月31日まで

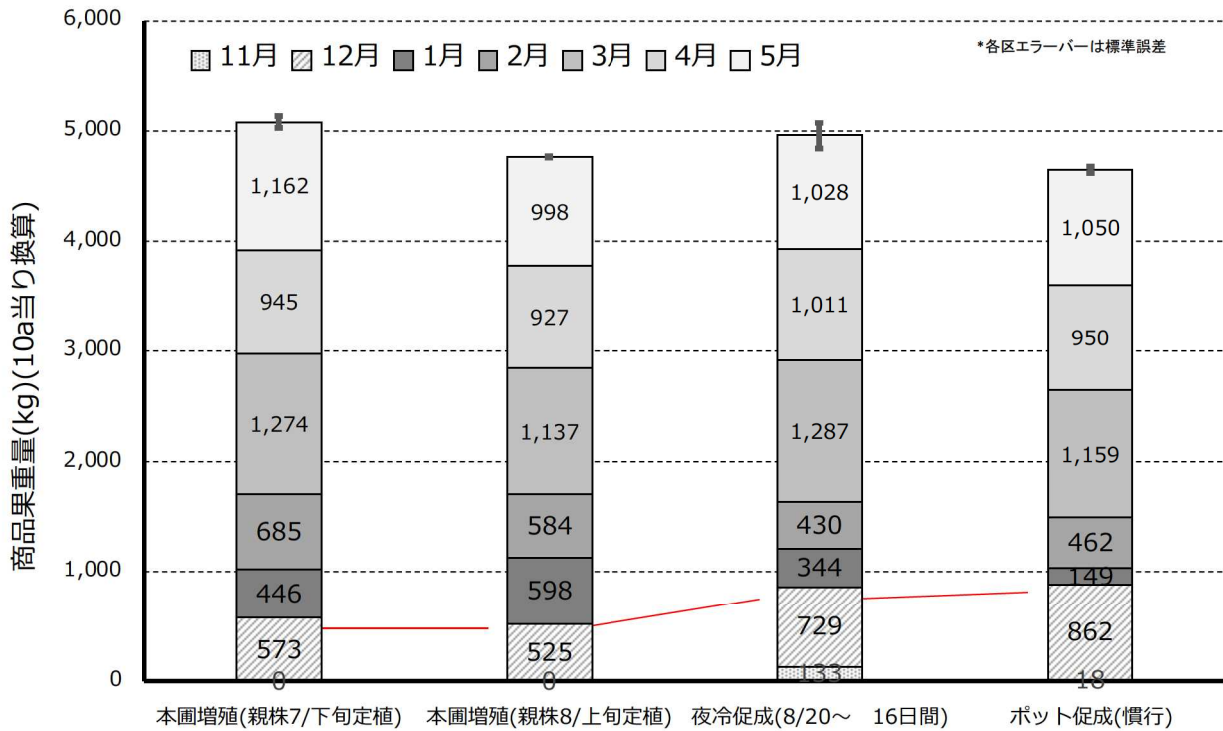


図3 「女峰」本圃増殖作型の商品果収量、慣行栽培との比較

④慣行区の年内収量は 10a 当り 800kg 以上となっていますが、1 月は大きく落ち込んでおり、2 月も 12 月の約半分しか収穫できていません。対して本圃増殖区は①、②とも 12 月の収量は 6 割程度にとどまりますが 1 月、2 月の収量の落ち込みが少なく、一定の収穫量が確保できることがわかりました (図 3)。

### 3 おわりに

本圃増殖を導入することで「女峰」においても育苗作業の軽減が可能となります。また、「女峰」は業務用として生産対応する場面も多く、産地全体として全期間コンスタントな出荷が求められます。そのため、主に収穫の谷となる 1 月、2 月に収穫量が落ちない本圃増殖作型を一部導入することでその対応が可能となると考えられます。

「女峰」は「さぬき姫」よりも花芽分化が遅く、本圃増殖はやや難しいのではと想定されましたが、「さぬき姫」に準じた栽培基準、特に 7 月下旬頃に定植することで十分な収穫量が確保されることがわかりました。今後、開花時期を安定化させるための窒素中断時期・期間の検討や、より省力化が図られる 4 倍増殖の試験などを進めていきます。

#### コラム (イチゴの種子繁殖育苗法について)

近年、イチゴでは種子繁殖という方法が開発されています。簡単に言うと「種まき」です。これ自体はタマネギやレタスなど野菜一般に広く用いられており、珍しいものではありません。しかし、イチゴではランナーと呼ばれる栄養繁殖体により苗を増やすことができるので、これまで用いられていませんでした。「写真 1」が栄養繁殖法で、プランターに植えた元株(親株)から発生する、ランナーを、小型ポットに受けて増やしているところです。

種子繁殖育苗法では種子イチゴ「よつぼし」などの専用 F<sub>1</sub> 品種を利用します。「写真 2」のように 200 穴セルトレイに播種された均一な苗が、手間をかけずに生産可能となります。播種作業など分業化が可能となることから、大規模な育苗施設が不要となるなど、これも省力化につながる新たな技術です。



「写真 1 栄養繁殖育苗法」



「写真 2 種子繁殖育苗法」